キンモクセイ

篠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キンモクセイ

【Ｎコード】
Ｎ９８７４Ｇ

【作者名】
篠

【あらすじ】
年の差なんて、あまり関係なくなった今日この頃。子どもと子どもの年の差、それは関係――？

プロローグ（前書き）

どうも。作者の篠です。
堅苦しくて読みにくい小説ですが、内容はとても分かりやすいものになっております。感想やご意見もじゃんじゃんお待ちしております。

プロローグ

プロローグ

朱夏は帰って欲しかった。
昼下がりの柔らかい光が部屋に落ちる。
見慣れたはずの自分の家のリビングが、他人がいるからか、知らない人の家みたいで。
「結城君可愛いわねー」
朱夏の母親が黄色い声を上げる。
その母親の視線の先には、二歳の可愛らしい男の子が母親に抱かれている。
「結城君はいくつになったの？」
「二歳になったのよ」
結城の母親が答える。
この前母親が結城の母親はイギリス人だと言っていた。イギリス人なんて朱夏には分からなかったけど、金色の毛が、悔しいけど綺麗だと思った。
「あら、二歳。一番可愛い年頃じゃない」
母親は結城の小さい手を触る。
朱夏は自分の相手をして欲しくて母親の手を握る。
「ほら、朱夏。お向かいに引っ越してきたモナさんよ」
母親は朱夏を抱き上げて結城の側へ近づける。
「いやあ」と抵抗したけれど、あっという間に結城と目が合う位置になってしまった。
朱夏は結城をにらみつけた。あんたが家に来たせいで母親が相手をしてくれなくなった。
という悪意をこめて。
しかし悪意をこめたのを裏腹に、結城は朱夏の指を握ってきたのだ。

「・・・・」
きょとんとした顔で結城を見る。するとニッコリと結城は朱夏に笑いかけてくれた。
そして何故か朱夏は結城の方が大人だな、と思ってしまうのであった。

そして思い返せばこの頃が一番楽しかった。
家に帰れば父親がいて。母親の美味しい料理が大好きだった。
しかしこの数年間で何もかも変わってしまった。
両親は離婚し、父は消息不明。
母親は昔とは比べ物にならないぐらい暗い人間になってしまった。
そして何かが伝染したように、向かいの家、結城の家庭も壊れていった。
結城の両親も離婚し、向かいの家には結城の父親が独り暮らしをするようになった。
昔みたいに笑い声が響く、そんな住宅地ではなくなった。

朱夏十六歳になった。
記憶の端くれにある、あの楽しかった日々にもう一度戻りたい、と思うのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9874g/

キンモクセイ

2011年1月5日02時35分発行